

MfG_J_history_of_Makino_Nagaoka_feudal_domain 2021 Oct改訂
240214 追記

ここでは、幕末の長岡藩を中心に説明しています。

長岡藩の歴史概略 151224_見学メモ

十九世紀の長岡の動向の概略
幕府の密命仮説

十九世紀の長岡の動向の年表まとめ

藩主と将軍家 (参考 良寛の時代)

幕末の老中と、長岡藩、三根山藩の藩主の関係

山岡荘八『徳川家康』全26巻と牧野氏の時代

詳細一幕末の老中と、長岡藩、三根山藩の藩主の関係

長岡市史双書55_奥羽行_旅の目的と背景

詳細年表_十九世紀の長岡の動向

長岡藩の第11代藩主牧野忠恭が、三河西尾藩第3代藩主松平乗寛の息子で、三河西尾藩第4代藩主松平乗全と兄弟であることが、大きな意味をもつ。

三根山八代領主牧野忠衛とも兄弟である。

三河西尾の松平家から養子をとを迎え、長岡藩11代牧野忠恭となったことが、その後の長岡藩の去就を決定的なものにしたと云える。

長岡藩10代の牧野忠雅

老中 1843-1857 海防掛担当

三河西尾藩第4代の松平乗全

老中 1845-1855, 1858-1860再任

長岡藩11代の牧野忠恭

老中 1863-1865 外国事務担当

151224_牧野長岡藩の歴史、見学メモ（さいわいプラザ）

牛久保時代

屋島の合戦で義経を勝利に導いた、阿波民部少輔・田口成能(=シゲヨシ)を祖先とする。
 応永年間(1394-1423)頃、三河の国牧野村(現愛知県豊川市牧野町=チョウ)に
 牧野城を築城し、田口姓から牧野に改名。

戦国時代

三河の国の守護・一色氏の拠った宝飯郡内に、牛久保城(現愛知県豊川市牛久保)を築城。

三つ柏の由来

若宮社参拝時、城を探せとの吉報を得て、近くにあった三葉柏を、家紋とした。

参州牛久保之壁書

・常在戦場の四字

侍之恥辱十七箇条

・虚言又人の仲を悪しくいいなすこと
 ・頭をはられてもはりても恥辱のこと

大胡時代

井伊直政(1561-1602)と同時代

家康に従った牧野成定(1525-1566)の子、牛久保城主・牧野貞成(1555-1609)は
 後に家康から一字をもらい、康成と改名。

天正18年(1590)8月、家康が、北条にかわって江戸に移封され、康成は上野の
 大胡(前橋市)で二万石の城主になった。

長峰時代

康成の子、二代、大胡城を作った忠成(1581-1654)が大阪の陣で功あり。

越後の国・長峰(上越市吉川区)に、五万石の城主となった。

藩主の時期 初代忠成(1609-1655)

二代忠成(1655-1674)

高田城主・酒井家次(10万石)、藤井城主・稲垣重綱(2万石)とともに、
 松平忠輝改易後の政情不安を収めた。

長岡時代

高田城主が酒井氏から井伊氏に代わり、蔵王堂主・堀直ヨリが村松城主になった
 元和4年(1618)、忠成は、長岡六万二千石の城主となった。

姉が嫁いだ福島正則改易の手続きの功により一万石加増、新田開発で二千石増、
 合計七万四千石を秀忠が認めた。

三階建ての隅櫓「御三階=オサンガイ」がシンボル

旧本丸が現JR長岡駅、旧二の丸が現アオーレ。

江戸初期、長岡藩の西、南は高田藩領、東は会津藩領。

その後、高田藩領の多くは、幕府領、旗本領、寺社領となった。

1. 幕末から二十年前の藩の状況と幕府の密命仮説

(1) 仮説

Secret orders hypothesis

by the confidential order of the Tokugawa Shogunate

幕閣会議において、ある時、

「どうも北海道で、ロシアが変な行動に出ている。備前守殿(牧野さん)、調べてみてくれまいか。」

「しかし、対外的に面と向かって、諜報活動は明らかにできない。

だから、他の藩にも、内密にな」

そして、一年後、調査報告の後、

「やはりな。南も騒がしいようだ。備前守殿、北の守りを用意してくれ。」

これも、密命であった。

(2) その背景

1800年代末からの日本近海の諸外国寄港

18世紀の末ごろから、ロシアの船がたびたび日本に接近するようになり、1792年には、ロシアの使節ラクスマンが根室に来航し、幕府に通商を求めてきたが、鎖国の日本はこれを拒否した。例の遭難者、大黒屋光太夫を、ロシアの使節ラクスマンが根室に連れ帰った事件。

小説の井上靖『おろしや国酔夢譚』文藝春秋(1968年)、映画『おろしや国酔夢譚』(1992年、大映 監督:佐藤純彌 主演:緒形拳)

司馬遼太郎『菜の花の沖』文藝春秋(全6巻)、1982年5月 - 11月

1979年4月1日から1982年1月31日まで1014回に渡り、『産経新聞』に連載。

また対馬も外国との接点のひとつだった。

1861年、ロシアの軍艦が、対馬に来航した。表向きは破損した船の修理に便宜をはかってほしいとのことであるが、実際は対馬藩主との直接対話で、領有権をうばおうとするものであった。藩主はある程度幕府から独立した権限があり、ロシアは、そこにつけこんだのである。実際、ロシアは英国の日本権益化の狙いを幕府に伝え、話を有利に進めようとしたようで、日本は、海外諸国の戦略を知っていたのである。

そして1864年、イギリス連合軍と長州藩が軍事衝突する下関戦争が勃発し、自国の脆弱さを身をもって知ることとなる。

2. 長岡藩の異常な行動の解明

(1) ロシア視察のため家来を北海道に派遣

藩主は、独自にロシア視察を目的に、家来を北海道に派遣していました。当時の歴代藩主が、三代続けて幕府老中職につき、海外事情に明るく、また1845年には阿部正弘とともに長岡藩主牧野忠雅も海防掛として、対外問題処理とこれに関わる国内政策立案、海岸防御などを担当していました。幕府は、日本海側沿岸諸藩のうち、最も信頼すべき長岡藩に、密命とも云うべき、対ロシア対策を指示したのではないのでしょうか。そういう背景無しに、藩主も、独自にロシア視察を目的に、家来を北海道に派遣したりしないでしょう。

(2) 安政二年(1856)の財政改革

自藩政策を見直し、軍事予算を捻出すべく、藩政改革に取り組んだのです。それが、継之助の財政改革に先行する、安政二年(1856)の大改革の本質ではないかと思います。

この安政二年に始まる財政再建は、以前に吉田の長岡藩御用商人の豪商今井家の説明の中でお話した内容です。

(3) 軍事改革など継之助の異例な抜擢人事

(4) 戊辰の役で武装中立を公表

2. 幕末から二十年前の藩の状況と幕府の密命仮説

Secret orders hypothesis

by the confidential order of the Tokugawa Shogunate

3. 結論

長岡藩の武装の仮想敵国はロシアだったのです。

でも、現代でもそうですが、対外的に面と向かって、想敵敵国は明らかにしないのが、外交の通常政策ですので、歴史資料にも残っていないのは当然と考えるのもいいと思います。

長岡藩の軍備拡張は、単なる武装中立、国内に向けたものではなく、本質は、「国内非戦中立・対異国武装対峙」だったと思いたい。

これが、たまたま戊辰の役の長岡藩の立場に影響し、武装中立をベースとした国内非戦を唱えることになったという認識です。

そうでなくて、こんな小藩が、あんな無謀なことをするはずがないのです。

詳細(*1)

文政7年(1824)、鹿児島藩所属の宝島でイギリス捕鯨船員による暴行事件が起こり、幕府はこの報告を重視し、翌年2月に異国船打払令を発布した。この江戸幕府の外国船取扱令で、日本近海に近づく外国船に対し、一切無差別に砲撃を加えて、排除することを定めたもので、別名を無二念打払令ともいう。文政年間に入ると、淡水・食糧を求めて日本近海に現れるイギリス・アメリカの捕鯨船が増加した。もともと日本側は、補給を求めて接近した船には必要品を供給した上で、江戸時代初期からの徹底した海外交通統制策(鎖国政策)がある旨を説明し、再航を禁じたのだが、少しも効果はなかった。そして、幕府側は、穏便に帰帆させるとともに、警備を厳重にするようにと呼びかけたので、沿海諸藩には異国船渡来は大きな負担となった。。天保8年(1837年)日本人の漂流民を乗せたモリソン号が漂流民送還と通商開始要求をめざし浦賀に入港したが、幕府はこれを拒否し、異国船打払令を楯に砲撃を加え、追い返した。

十九世紀の長岡の動向の年表まとめ

海外動向、商業勃興、軍備増強、万国公法

(1) 第9代 忠精さんの治世

- | | | | |
|------|----------------------------------|-----------|-------------------|
| 1766 | 牧野忠精家督相続
幕府と露・英の対峙 | 1776-1798 | 四国で和三盆確立 |
| 1801 | 忠精、老中就任、1816-再就任 | 1778 | 大和屋創業 |
| 1806 | 幕府が若年寄、大目付に蝦夷地見聞を指示 | 1805 | 紅屋重正創業 |
| 1807 | ロシア、択捉幕府軍攻撃 | | |
| 1807 | 牧野忠精、独自に各藩の対応探究などに藩士2名を東北、北海道に派遣 | | |
| 1808 | 藩校崇徳館創立される | 1808 | 間宮林蔵が樺太探検 |
| 1825 | 幕府、異国船打払令を發布 | | 密命、旅日記
でも「密談」。 |
| 1831 | 忠精、老中辞任、牧野忠雅家督を相続し、第10代長岡藩主に就任 | | |

(2) 第10代忠雅さんの治世

- | | |
|------------|-----------------------------------|
| 1832 | 越のむらさき |
| 1842 | 長谷川酒造 |
| 1846 | 星野本店 と、ぞくぞく創業 |
| 1836 | アメリカで『万国公法』発刊 |
| 1843 | 幕府が長岡藩に新潟町上知 |
| 1840-1842 | 阿片戦争 |
| 1843 | 忠雅が老中に就任 |
| 1856-60 | 清と英仏、アロー戦争 |
| 1857-1858年 | 対英、インド独立戦争 |
| 1844 | 幕府の指示により、藩が新潟の五十嵐浜、越前浜などの警備人数を増加 |
| 1844 | 藩が城外で軍事訓練を始める |
| 1845 | 藩主忠雅が幕府老中兼海防掛 |
| 1850 | 虎三郎が藩命で江戸遊学 |
| 1853 | アメリカ、ペリー浦賀来航 |
| 1853 | ロシア、プチャーチンが3隻からなる艦隊を率いて長崎に来航 |
| 1853 | ロシア、プチャーチンが3隻からなる艦隊を率いて長崎に来航 |
| 1854 | 虎三郎が下田開港反対、神奈川開港を老中牧野忠雅に進言し、帰藩・謹慎 |
| 1854 | 日米・日英・日露(1855Feb)和親条約 |
| 1855 | 鵜殿団次郎、25歳の時、江戸に遊学 |
| 1856 | 長岡藩、安政二年(1856)の財政改革 |
| 1861 | ロシア、対馬藩を脅し、開国を迫る |
| 1864 | イギリス連合軍と長州藩が軍事衝突する下関戦争が勃発 |

- (3) 第11代忠恭さんの治世 1858 下田・箱館・長崎が開港
- 1857 牧野忠恭が家督を相続、第11代長岡藩主となる
- 1857 幕府、講武所内に軍艦教習所開設
- 1858～1860 河井継之助, 江戸・西国遊歴
- 1861 ロシア、対馬藩を脅し、開国を迫る
- 1862 団次郎、幕臣に、さらに蕃書調所教授
- 1863 藩が佐渡警備に藩兵230人を新潟に駐屯
- 1863 忠恭が老中に就任、外国事務取扱 1861-1865 米、南北戦争
- 1863 『万国公法』、中国で米人宣教師が漢訳 1864 禁門の変
- 1864 イギリス連合軍と長州藩が軍事衝突する下関戦争が勃発
- 1865 継之助が財政・軍政など藩政改革に着手（郡奉行就任、慶応の改革）
- 1865 『万国公法』、日本で覆刻、長岡の崇徳館に伝わり、藩士の目に・・・
- 1867 藩主忠恭が第二次長州征討に出兵 1866 薩長同盟の密約(3月)
- 1868 鳥羽・伏見の戦い(戊辰戦争始まる)
河井継之助軍事総督となる
藩兵出兵し、摂田屋村光福寺に本陣をおく

長岡藩の軍政の
動きと武装中立

文末に、詳細年表_十九世紀の長岡の動向

歴代長岡藩主と将軍家（参考 良寛の時代）

初代長岡藩主忠成の祖父・成定以前の牧野家は、諸説があるが、戦国大名今川氏に属して松平氏（徳川家）と対立。その後、成定の代に徳川家康家臣の酒井忠次配下の東三河国衆として徳川軍に所属し、そのまま家康の関東移封に随従。1590年大胡藩2万石の藩主、1616年越後長峰藩5万石藩主を経て、

元和4年(1618年)に越後長岡の領主。

	家康 1603 - 1605	
1	1616 - 1655 忠成(ただなり)	秀忠 1605 - 1623
		家光 1623 - 1651
2	1655 - 1674 忠成(ただなり)	家綱 1651 - 1680
3	1674 - 1721 忠辰(ただとき)	綱吉 1680 - 1709
		家宣 1709 - 1712
4	1721 - 1735 忠寿(ただかず)	家継 1713 - 1716
5	1735 - 1746 忠周(ただちか)	吉宗 1716 - 1745
		享保の改革
6	1746 - 1748 忠敬(ただたか)	
7	1748 - 1755 忠利(ただとし)	家重 1745 - 1760
8	1755 - 1766 忠寛(ただひろ)	家治 1760 - 1786
9	1766 - 1831 忠精(ただきよ)	家齊 1787 - 1837
		寛政の改革
#	1831 - 1858 忠雅(ただまさ)	家慶 1837 - 1853
		天保の改革
#	1858 - 1867 忠恭(ただゆき)	家定 1853 - 1858
#	1867 - 1868 忠訓(ただくに)	家茂 1858 - 1866
#	1868 - 1870 忠毅(ただかつ)	慶喜 1866 - 1867

藩主忠精の時代～良寛

天候不順による洪水・凶作と疫病

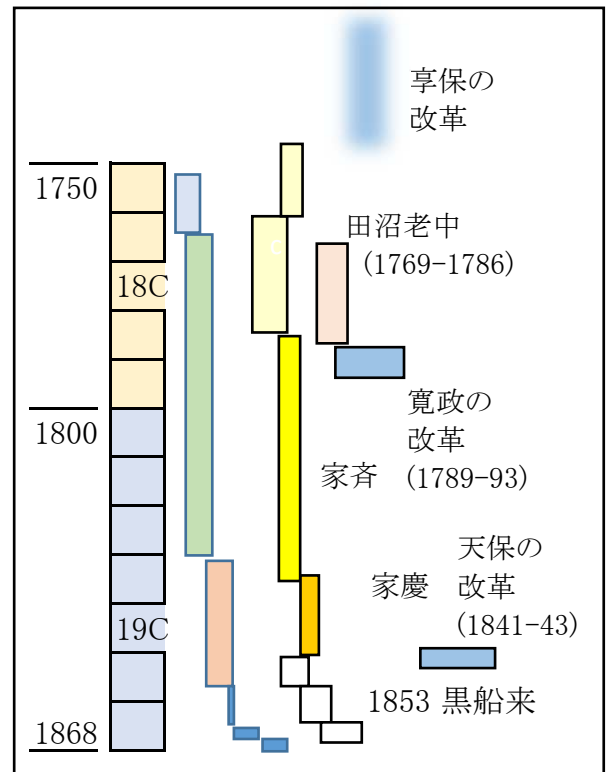
藩主忠雅、将軍家慶の時代

1840 長岡藩に三方領地替の話

1843 幕府に新潟町上知

1844 長岡藩に幕府が新潟浜

警備増を指示



参考 良寛は、忠精公の時代

1790年	33	師国仙和尚が良寛に印可の偈を与える。
1796年	39	前年に父以南が死去し、帰国。郷本の空庵に仮住まいか。
1797年	40	国上山の五合庵に定住。一時、寺泊照明寺密蔵院などに仮住まい
1802-5年	45	寺泊の照明寺密蔵院や牧ヶ花の観照寺に仮住まい。
1814年	57	鈴木文臺を「斯の児、異日必ず大器を成すべし」とほめたたえた。
1816年	59	乙子神社草庵に移住。藩主の忠精、五合庵に良寛を訪ねる
1826年	69	島崎の木村家内草庵に移る。
1827年	70	夏、寺泊の密蔵院に仮住。秋に貞心尼と初相見。
1828年	71	11月12日、三条大地震。貞心尼(1798 - 1872年)
1831年	74	前年夏より病、この正月6日、申の刻、良寛遷化。8日葬式。

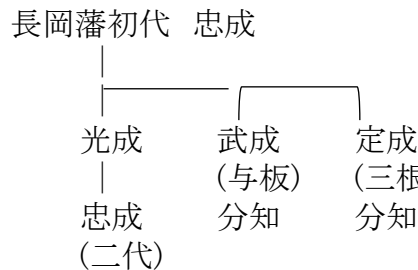
幕末の老中と、長岡藩、三根山藩の藩主の関係

1. 幕末の長岡藩、三根山藩の藩主の関係



松平乗寛(のりひろ) 三河西尾藩第3代藩主。生没年:1777-1839 老中 1822-1839
松平乗全(まつだいら のりやす) 生没年:1794-1870 三河西尾藩第4代藩主。3代藩主松平乗寛の長男。 老中 1845-1855, 1858-1860再任
牧野忠恭(ただゆき) 生没年:1824-1878 越後長岡藩の第11代藩主 老中 1863-1865 外国事務担当 1865年、河井継之助が郡奉行となる。 12代藩主忠訓のもと、1867年家老に、1868年上席家老になる。
牧野忠衛 八代三根山領主、生没年:1799-1834 父:三河西尾藩三代藩主 松平乗寛。 義父:七代三根山領主 牧野忠救。

2. 越後長岡藩初期の三根山分知



・忠精の時代は災害との闘いでもあった
長岡藩政史上でも損害が大きい洪水
天明元年(1781)と寛政元年(1789)、2度とも
長岡城が浸水 表高の9割、実高の
半分以上の米穀損害高を出し
天明4年(1784年)の大飢饉(天明の大飢饉)
文政11年(1828年)11月の三条地震

・幕末期の70年余の間、半分で幕府老中職
1801-68の68年間で、藩主は延べ32年間
幕府老中職、特に海防掛。

参考

- 9 牧野忠精(まきの ただきよ) 生没年:1760-1831 越後長岡藩の第9代藩主
老中 1801-1816, 1828-1831再任
- 10 牧野忠雅(ただまさ) 生没年:1799-1857 越後長岡藩の第10代藩主。
老中 1843-1857 海防掛担当 牧野忠精の四男
1857年(安政4年)、ロシアと対抗するため、他の老中4人とともに、
それぞれ藩士を蝦夷地に派遣。
- 11 1858年 - 1867年 備前守 忠恭(ただゆき)
老中 1863-1865 老中 海防掛担当
河井継之助を公用人として重用し藩政改革
- 12 1867年 - 1868年 駿河守 忠訓(ただくに)
- 13 1868年 - 1870年 忠毅(ただかつ)

山岡莊八『徳川家康』全26巻と牧野氏の時代

豊川・牛久保の地で、西三河の松平氏と駿河の今川氏の間に入り、特に両者との、百年にわたる戦闘と存亡の危機を乗り越えた。

第1巻 出生乱離の巻（於大、広忠の婚姻 家康の出生1543）

～ 上杉謙信 生まれる 1530

第2巻 獅子の座の巻（織田家に拉致される1547

父の広忠の死1549 人質交換で今川家に1549）

～ 吉之川創業 天文17年(1548)、このころ景虎(のちの謙信)が
枋尾入城(1543年、14才)

牧野康成(のちの大胡城主)、牛久保に生まれる。1555

第3巻 朝露の巻（織田家の台頭 桶狭間の戦い1560）

第4巻 葦かびの巻（岡崎への帰還1560 織田信長との同盟

一向一揆1563-64）

～ この巻の山場のひとつ、信長と元康(のちの家康)の清州対面。
このころ、元康は老臣に支えられている。

康成の父の牧野成定が家康に謁見し、家康の家臣となる。1566

第5巻 うず潮の巻（三方ヶ原の大敗1573 信玄の死1573）

第6巻 燃える土の巻（武田勝頼との戦い 家臣の裏切り）

第7巻 颯風巻の巻（長篠の戦い1575 信康の切腹1579）

～ 上杉謙信歿 1578、御館の乱、上田長尾氏が古志長尾氏を
亡ぼす形となり、中越の城の大半が放棄される

第8巻 心火の巻（武田家の滅亡1582 本能寺の変1582）

牧野康成、家康の伊賀越えに随行。1582

詳細—幕末の老中と、長岡藩、三根山藩の藩主の関係

松平乗全(まつだいら のりやす)

寛政6年(1794年):生誕 明治3年(1870年):死去。享年76

幕末の大名、老中。三河西尾藩第4代藩主。大給松平家宗家9代。

弘化2年(1845年):老中

安政2年(1855年):老中を免職させられる

安政4年(1857年):帝鑑間席より溜詰格に栄転する

安政5年(1858年):老中再任 安政6年(1859年):間部詮勝免職に伴い老中首座を担当

万延元年(1860年):老中辞任

3代藩主松平乗寛の長男。母は阿部正倫の娘。

弟に越後長岡藩に養子入りし、老中を務めた牧野忠恭がいる。

同じく老中の阿部正弘は母方の従弟で、老中で日本赤十字社創設者の

一人でもある松平乗謨(後の大給恒)は外孫にあたる。

松平 乗寛(まつだいら のりひろ)は、江戸時代後期の老中、三河西尾藩第3代藩主。

1822年(文政5年)老中に就任。

1839年(天保10年)在職中死去。享年63

長岡藩 幕末の藩主

牧野 忠恭(まきの ただゆき)越後長岡藩の第11代藩主。長岡藩系牧野家宗家12代。

文政7年(1824年)9月1日、三河西尾藩主・松平乗寛の三男として江戸に生まれる。

明治11年(1878年)9月1日、55歳で死去した。

文久3年(1863年)老中就任。外国事務を取り扱うことを命じられた。

慶応元年(1865年)4月13日、政局に難題が積まれるに及んで老中職を退いた。

京都所司代、老中の辞任はいずれも河井の進言によるものだった。

慶応3年(1867年)7月11日、隠居し、養子忠訓に家督を譲った。

北越戦争を経て謹慎し、明治に入ってから許される。明治8年(1875年)2月、

四男忠毅の隠居により、家督を再び相続した。明治11年(1878年)9月1日、

55歳で死去した。

三根山藩 幕末の藩主

牧野忠衛 生没年:1799-1834

父:三河西尾藩三代藩主 松平乗寛

義父:七代三根山領主 牧野忠救

牧野 忠精(まきの ただきよ)は、越後長岡藩の第9代藩主。長岡藩系牧野家宗家10代。

第8代藩主・牧野忠寛の長男。老中を務めた、寛政の遺老の一人である。

宝暦10年(1760年)に生まれる。

長男の忠鎮が松平定信の縁戚に当たることから、奏者番、寺社奉行、大坂城代、

京都所司代、老中など要職を歴任した。また京都所司代時代は伊藤東所に学ぶ。

長岡藩政史上でも損害が大きい洪水が天明元年と寛政元年(1789年)に起こり、2度とも

長岡城が浸水し、寛政期の洪水では流家・潰家585件及び6万6,000石以上という、

表高の9割、実高の半分以上の米穀損害高を出し、天明4年(1784年)の大飢饉

(天明の大飢饉)、文政11年(1828年)11月12日の三条地震では長岡城の施設の

大破、城下潰家220件、郷中潰家3,522件、田畑荒廃955町歩余り、死者442人などの

被害が出、その翌年には大風で城内破損35箇所、家屋倒壊162戸などの被害を

受けている。

1801年(享和元年)7月11日、老中。

1816年(文化13年)10月13日、老中免。

1828年(文政11年)老中再任。

1831年(天保2年)老中辞任、隠居

牧野 忠雅(ただまさ) 寛政11年(1799年)-安政5年(1858年)

越後長岡藩の第10代藩主。 第9代藩主・牧野忠精の四男。老中となり海防掛担当。

天保14年(1843年)11月1日、老中

安政4年(1857年)9月10日、老中辞任・溜詰格

参考

(1) 北海道に派遣

1807 牧野忠精、独自に各藩の対応探究などに藩士2名を東北、北海道に派遣
長岡市史双書55_奥羽行_旅の目的と背景

凡例

一 密かに藩中の命を奉り、遠く北辺を探るの役、不屑の僕等誠に
其恐れなきにあらず、・・・

本文冒頭の「凡例」には、この旅の目的が書かれている。
それは、藩命により密かに「遠く北辺を探る」ことであった。
旅日記は、後に藩命により北地に入る人の道しるべとして
藩中の役を助けんと願い、筆をとる、とある。

(2) ホイートン『万国公法』の影響

藩校崇徳館、阪之上小に伝わる「万国公法」復刻本に、
「論戦時局外之権」の言葉がある。～阪之上小・伝統館でも、この頁を展示

局外中立の権利、局外中立による生き残りの可能性を知り、
高田での西軍による三万両差出し命令に対し、「朝廷に敵意はなく、
また会津にもいささかの含みもない」とした発想のもと。

(3) 新潟港での薩摩見逃しの罰として、新潟上地。

でも大きながめは、それだけ。

1840 川越藩、庄内藩および長岡藩の3藩に対し三方領地替え。

翌年沙汰やみとなったが、取り消しは、これのみ。

何か、伏線があったのでは。「庄内の反対も大きい、長岡は動かすな

1843 幕府が長岡藩に新潟町の上知を命じる

幕府は、防衛力強化のため、新潟直轄、長岡藩との強調を選択。

そうすめために、無理に罪状を作ったのかも。

そう考えないと、老中任命はありえない。

1843 10代藩主牧野忠雅が老中に就任

1844 幕府の指示により、藩が新潟の五十嵐浜、越前浜などの警備人数を増力

1844 藩が城外で軍事訓練を始める

詳細年表_十九世紀の長岡の動向

- 1736 蠟座創建
- 1766 牧野忠精家督相続、第9代藩主となる
- 1776-1798 四国で和三盆確立
- 1778 大和屋創業
- 1805 紅屋重正創業
- 1781-1788の天明年間 小千谷縮の生産拡大
- 1793 ロシアの使節ラクスマンが大黒屋光太夫を連れ根室に来航
- 1799年 松前藩にかわって幕府が蝦夷地の直轄統治を開始、
最上徳内や近藤重蔵に蝦夷地探検を行わせた
- 1801 忠精、老中就任、1816-再就任
- 1806 1月、江戸幕府は異国船打払令を廃止し薪水給与令(文化の撫恤令)を發布。
同年9月にロシアが蝦夷地の日本側拠点である樺太の松前藩の番所を襲撃。
- 1806 幕府が若年寄、大目付に蝦夷地見聞を指示
- 1807 5月にロシアが択捉島駐留の幕府軍を攻撃。
江戸幕府は薪水給与令を撤回し、同年12月にはロシア船打払令發布
- 1807 牧野忠精、独自に各藩の対応探究などに藩士2名を東北、北海道に派遣
- 1808 藩校崇徳館創立される
- 1808 間宮林蔵が樺太探検
- 1818 -1831 文政年間、淡水・食糧を求め日本近海にイギリス・アメリカの捕鯨船増加
- 1824 鹿児島藩所属の宝島でイギリス捕鯨船員による暴行事件
- 1825 幕府、異国船打払令を發布
- 1828 シーボルト事件(幕府天文方が日本地図を送り処刑される)
- 1831 忠精、老中辞任、牧野忠雅家督を相続し、第10代長岡藩主に就任

- 1832 越のむらさき
- 1842 長谷川酒造
- 1846 星野本店 と、ぞくぞく創業

- 1836 アメリカで ホイートン『万国公法』のテキスト発刊
- 1840 阿片戦争 1842年に南京条約。中国の凋落が決定的になる
- 1840 川越藩、庄内藩および長岡藩の3藩に対し三方領地替え、
翌年沙汰やみ。
- 1843 幕府が長岡藩に新潟町の上知を命じる
- 1843 10代藩主牧野忠雅が老中に就任
- 1844 幕府の指示により、藩が新潟の五十嵐浜、越前浜などの警備人数を増加
- 1844 藩が城外で軍事訓練を始める
- 1845 藩主忠雅が幕府老中兼海防掛に任じられる

- 1849 ポルトガルがマカオを植民地化
- 1850 小林虎三郎が藩命で江戸に游学、佐久間象山に入門、蘭学と砲術を学ぶ
- 1853 アメリカ、ペリー浦賀来航
- 1853 ロシア、樺太を占領したが、同年3月のクリミア戦争勃発を受けて撤退
- 1853 ロシア、プチャーチンが3隻からなる艦隊を率いて長崎に来航
- 1854 小林虎三郎が下田開港に反対し、神奈川開港を老中牧野忠雅に進言し、帰藩・謹慎を命じられる
- 1854 日米・日英・日露(1855Feb)和親条約
- 1855 鵜殿団次郎、25歳の時、江戸に游学
- 1856 長岡藩、安政二年(1856)の財政改革
- 1856-60 清と英仏、アロー戦争
- 1857 牧野忠恭が家督を相続、第11代長岡藩主となる
- 1857 幕府、講武所内に軍艦教習所開設
- 1857-1858年 1857-1858年 対英、インド独立戦争(民族的抵抗運動)
- 1858 プチャーチン長崎に再来航、日露修好通商条約
- 1858 下田・箱館・長崎の3港が開港
- 1858 フランス、インドシナを植民地化をはじめる
- 1858~1860 河井継之助、江戸・西国遊歴
- 1861-1865 米、南北戦争
- 1862 鵜殿団次郎、幕臣に取り上げられ、蕃書調所の教授となる
- 1863 藩が佐渡警備のため藩兵230人を新潟に駐屯させる
- 1863 牧野忠恭が老中に就任
- 1863 藩主忠恭が外国事務取扱となる
- 1863 『万国公法』、中国で、アメリカ人宣教師が漢訳

- 1864 禁門の変(蛤御門の変)、佐久間象山害死(54歳)
- 1865 河井継之助が外様吟味役から郡奉行に任じられる
慶応元年(1865年) 外様吟味役に再任、その3ヶ月後に郡奉行就任。
これ以後、継之助は藩政改革に着手
- 1865 『万国公法』、日本で覆刻、長岡の崇徳館に伝わり、藩士の目に・・・
- 1866 薩長同盟の密約(3月)
- 1867 藩主忠恭が第二次長州征討に出兵を命じられ、
大坂に向け藩兵を率いて江戸を出発(1月)
- 1868 鳥羽・伏見の戦い(戊辰戦争始まる)
河井継之助軍事総督となる
藩兵出兵し、撰田屋村光福寺に本陣をおく